国立国語研究所学術情報リポジトリ

埼玉県特殊アクセントにおける3拍名詞の音調：久喜市高年層に見られるゆれとその解釈

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-03-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 亀田, 裕見
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002730

埼玉県特殊アクセントにおける３拍名詞の音調
—久喜市高年層に見られるゆれとその解釈—

亀田　裕見
（文教大学文学部）

１．曖昧アクセントにおける音調のゆれ

曖昧アクセントと呼ばれる方言アクセントは全国に散在する。曖昧アクセントとは，話者において音韻論的型の意識が不明瞭であり，発話においても型があるようでいてはっきりせず「ゆれ」が見られるアクセント，と一般的に理解されている。そのような地域では，話者は個人内・個人間で客観的に聞いて異なるアクセントで話しながら，それに違和感を持っていない。本論で取り上げる埼玉県久喜市について，金田一(1977)は「一般に型の区別が明瞭でない」けれども「きわめて規則的な型の対応関係がある。」。発話される音調が違っても地元の人は「それほどちがったアクセントで話しているとは感じていないらしい」という記述がある。なぜそのような状態が共時的に存在可能なのであろうか。本論では埼玉県の東部に分布する埼玉特殊アクセント地域に属する久喜市の高年層における音調をもとに，曖昧アクセントにおけるゆれの程度やゆれの状態を分析していきたい。

埼玉特殊アクセントは金田一春彦氏の昭和初期の調査によりその存在が知られ，多数の研究者による調査・分析があるが，この狭い地域の中で地域差が大きいことが指摘されている。例えば，「雨」はアに対してメの方が高く，逆に「飴」はアの方がメより高くなる音調がよく聞かれ，この音調が京阪式アクセントの音調に似ていることで注目を集めたが，これは東京式のアクセントの変種と位置づけられている。研究はこのような状態を通時的に位置づけようとするものと共時的に解釈しようとするものに分かれる。しかし，その際ゆれについて詳述されているものはあまりない。本論ではこの埼玉特殊アクセント地域の中から，久喜市における調査結果を基にゆれのあり方を共時的に分析する。久喜市ではゆれが非常に多い。金田一（前掲）では「久喜式アクセント」と呼び，「草加式アクセント」と栃木や茨城に分布する「無型アクセント」との「中間的性質」をもったもので，「箸」と「橋」，「雨」と「飴」といった同音異義語を区別して発音しているように聞こえるが，その形は東京のアクセントと違うと述べられている。実際その「中間的性質」というものは，まさに個人内・個人間のおおきな音調相のゆれとして見ることができる。

曖昧アクセントの研究として，佐藤（1974）がある。宮城県の無型アクセント地域と接する曖昧アクセント地域で「助詞を付けない語単独の発音と助詞を付けたときの発音とで，アクセントの山の位置が異なることが多いという点も，曖昧アクセントの特徴の一つである」という指摘がされている。これは久喜市にそのまま当てはまる。また，「文の形で調査した方が，文節言い切りの形で調査したときよりも，ゆれ幅の小さい比較的安定した音相が得られるという傾向は，この話者に限らず，曖昧アクセント話者に多く見られる現象である」という指摘もある。これについては，久喜市ではそのような話者もいれば逆である話者もいる。しかし，これらは曖昧アクセン

トを考える上で非常に重要な点であることは間違いない。

秋永・佐藤・金井（1971）は埼玉特殊アクセント地域を調査地点に含んでおり，多数回発話で調査しているかは定かでないが，発話形式によるアクセントの傾向の違いが示されており，「単独の形の方がより早く，次に付属語のついた形の場合にアクセントの型の区別が失われていく」と報告されている。さらには1拍語や2拍語の短い語の方が3拍語より早く型区別が失われていくとも述べられている。

大野（1984）では久喜市は隣接する白岡町と菖蒲町と同様に「やや曖昧な埼玉アクセント」と位置づけ，菖蒲町の３拍名詞について「１・６類が○●○／○●●△」，「２・４類が○●○／○●○△」「３・５類が○●◎／○●◎△か●○○／●○○△」とし，３・５類で「このように２つの型を持つことが特徴」とする。ゆれではなく型が二つあるという分析である。

２．調査概要

本論では，このような久喜市の3拍名詞におけるゆれの傾向から読み取られることをまとめていきたい。従来，2拍名詞に関する研究は多いが，3拍以上の語についての研究はあまりなかった。ゆれの状態を見るのには長い語の方が適していると考える。

2007～8年および2013年に埼玉県久喜市の高年層15名を調査した。話者は大正５年～昭和14年生まれの生え抜き男女で，2013年度時点の平均年齢は83歳である。3拍名詞35語（追加調査した6名にはさらに9語）を単独の発話（以下「単独」）と・助詞ガをつけた文発話（以下「文」）でそれぞれ順番をランダムに入れ替えて3回発話していただいた。（同時に2拍語の調査もし，2回目・3回目発話は2拍語と混ぜた順序で発話）調査語は以下の通りである。

Ⅰ類：着物・形・車・鼻血・鰯
Ⅱ類：毛抜き・小豆・間・桜・トカゲ
Ⅲ類：二十歳・岬・小麦・サザエ・力
Ⅳ類：頭・男・鋏・暦・宝
Ⅴ類：命・油・涙・朝日・柱
Ⅵ類：烏・鼠・兎・狸・蓬
Ⅶ類：兜・苺・便り・蚕・鯨

（追加語：五つ・心・夏日・願い・お箸・お玉・試験・卵）

３．ゆれの実態

型の弁別意識が曖昧である点を2拍名詞のミニマルペアの比較発話から確認する。

【表１】ミニマルペア比較発話と区別意識

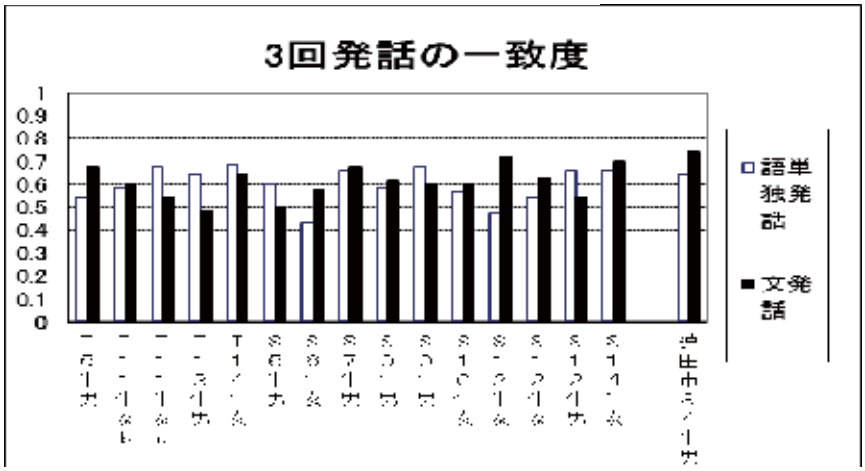
T6女	同じ	同じ	同じ	違う	同じ
T11女	違う	少し違う	同じ	同じ	同じ
T11女	同じ	同じ	同じ	同じ	同じ
T13男	同じ	少し違う	違う	[illegible]	少し違う
T14女	同じ	同じ	同じ	同じ	同じ
S24女	同じ	同じ	同じ	同じ	同じ
S56女	違う	同じ	同じ	同じ	少し違う
S64女	少し違う	同じ	同じ	同じ	同じ
S[illegible]男	[illegible]	[illegible]	違う	同じ	違う
S64[illegible]	同じ	同じ	同じ	同じ	同じ
S[illegible]男	違う	違う	少し違う	[illegible]	同じ
S1[illegible]女	違う	違う	違う	違う	[illegible]
S1[illegible]女	少し違う	少し違う	少し違う	少し違う	少し違う
S1[illegible]男	同じ	違う	同じ	同じ	同じ
S1[illegible]女	少し違う	違う	違う	同じ	同じ

【表２】２人の話者のミニマルペア比較発話の音調

箸	箸が[illegible]い。	●○	●●△, ○●△	同じ
橋	橋が[illegible]る。	○●	○●△	
飴	飴がある。	●○	●●▲	同じ
雨	雨が降る。	●○	●●▲	
泡	泡が[illegible]らこ。	●○	●○△, ●●△, ○●△	同じ
蜂	蜂がある。	○●	○●△, ●●△	
柿	柿がなる。	●○	○●△	同じ
土橋	土橋が[illegible]る。	●○	○●△	
川	川がある。	●○	●●△	同じ
皮	皮が伸びる。	●○	●●△	

T12年女

語	文	発話		同音反応
箸	箸が[illegible]い。	○●	●●△	少し違う
橋	橋がもげる。	○●	●○△	
飴	飴がある。	○●	○●△	少し違う
雨	[illegible]が降る。	○●	○●△	
泡	泡が[illegible]らこ。	●●	●●△	少し違う
蜂	蜂がある。	●○	●●△	
柿	柿がなる。	●●, ●○	●●△, ○●△	少し違う
土橋	土橋が[illegible]る。	●○	○●△	
川	川がある。	●○	●●△	少し違う
皮	皮が伸びる。	○●	○●△	



【図２】

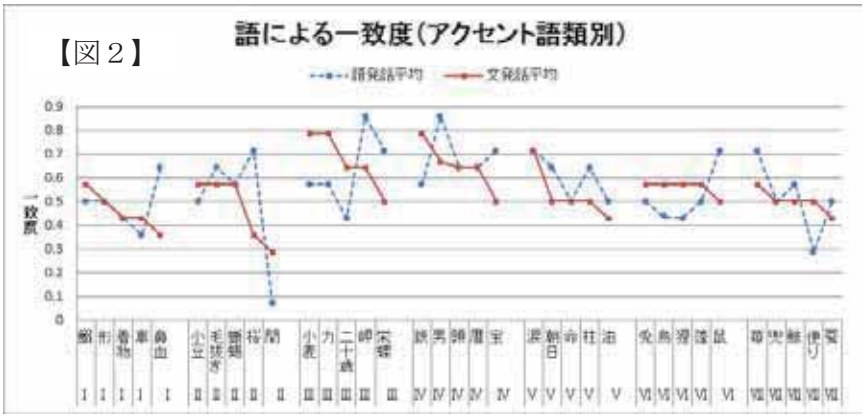


表１・表２のように音調がゆれつつ,「なんとなく違う」「すこし違う」「同じ」という，ばらばらな反応が得られる。内省意識は個人差が大きく，ペアが「同じ」だとしながら音調が異なったり,「違う」としながら同じだったりし，自身の発話がゆれているという自覚もないことが確認できる。

さらにゆれの状態を概観するために「一致度」を算出した。算出方法は３回発話で３回とも同じ＝1点　2回同じ＝0.5点　3 回とも異なる＝0 点とし，その平均を求めた。

図１によると，3 拍語の 3 回発話なら二回は同じになっても 1 回は異なる音調になること，語単独発話と文発話でどちらがゆれるのかは個人によって異なるようである。

４．音韻論的型以外の音調規則

本論ではこのようなゆれのあり方を「音韻論的型」と「音声学的規則」の存在とその適用における力の張り合い関係の異なりとして解釈を試みる。このような解釈の可能性についてはすでに上野善道氏によって提示されている。埼玉特殊アクセント地域の音調についても，久喜市にほどちかい蓮田市について，上野（1984）で，東京式と同じ位置の「上げ核」に氏の言う「句音調」｛「○○⌉○･･･｝が加わっていると解釈している。この解釈によって重起伏の音調相の解釈が可能になっている。ただ，音調にゆれはないという前提での解釈のようである。本論のいう「音声学的規則」は氏の「句音調」に近いものと言ってよいかと思うが，この規則がいわゆる「句」にかかっているのかどうかという点は別途熟考すべきである。今回は取り上げないが，語の前になんらかの修飾語句を置いて，単語が文頭に来ない発話の調査をしてみたが，多くが文頭であろうと非文頭（句の途中）であろうと，「音声学的規則」が現れることが分かった。

上野氏の蓮田市の分析に音調のゆれは示されていないが，「一口に「曖昧化」と言っても，その内容は種々で，その度合いにも色々の段階があり，明瞭と曖昧が一本の線で截然と分けられるような物ではない」，「そういう所では個人差もまた大きい」，「ある世代に一斉に曖昧化が起こるのではなく，いち早くそうなっている人と，かなり遅くまで明瞭な段階を保つ人とが共存していることは考えられる。」と述べ「全体の音調型が句音調とアクセント素の弁別特徴の和としてだけで説明できるとは限らないようである。」，「句音調とアクセント核との関係（共起関係や，句音調から核への変質を含む歴史的関係など）も同然問題になる」という指摘は非常に重要である。まさに，本論はそのような解釈の可能性として，音韻論的型と音声学的規則が，常に対等の力をもって現れるのではなく，音韻論的型が常に優勢な東京語とは異なり，前者のみ，または後者のみ，または両者が現れる，と設定する解釈を示すものである。

５．音調をつくる規則とその適用の解釈－二人の話者を例に－

以下では音調相を上昇位置と下降位置の数字の組み合わせで表す。例えば文発話で[○●●△]の場合，括弧の左側に上昇，右側に下降の位置を[2-3]のように示す。

上昇位置　１：「○○○△　２：[○「○○△　３：[○○「○△

下降位置　１：○⌉○○△　２：○○⌉○△　３：○○○⌉△　４：○○○△⌉　０：下降なし

1.5：2 拍目の拍内下降　　2.5：3 拍目の拍内下降

まずA氏（S12 生まれ女性）のケースを取り上げる。3 回発話のゆれの音調から語をグループａ～ｄに分類した。その結果が表４である。図３にはそれぞれ左側に語単独発話，右側に文発話の３回発話の結果をこの数字で表した。３回分の音調は発話順ではなく発話の似ているものを近くに配置した。グループそれぞれの音調のゆれの特徴をまとめると

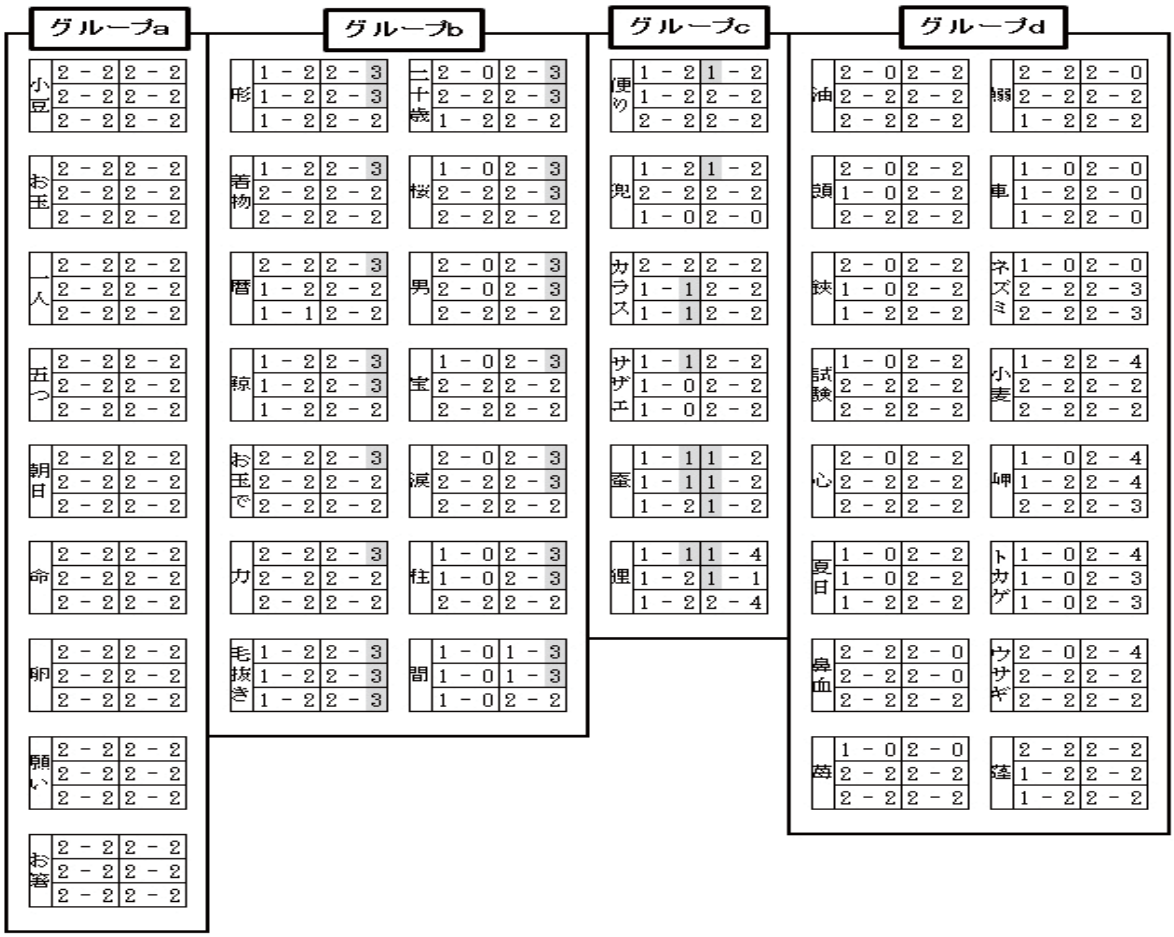
グループａ：単独・文とも[2-2]で安定。

グループｂ：単独ではゆれが多様，文は[2-3]・[2-2]に収束。文で下降 3 が現れる点が特徴。

グループｃ：単独で[1-1][1-2]が主，文で[1-2][2-2]が主。文で上昇１が現れる点が特徴。

グループｄ：ａ～ｃに当てはまらないもの。単独で[2-2][2-0][1-0]，文で[2-2][2-3][2-0]など多様。下降に「０」がよく現れる点が特徴

【図３】A氏の発話のグループ分け

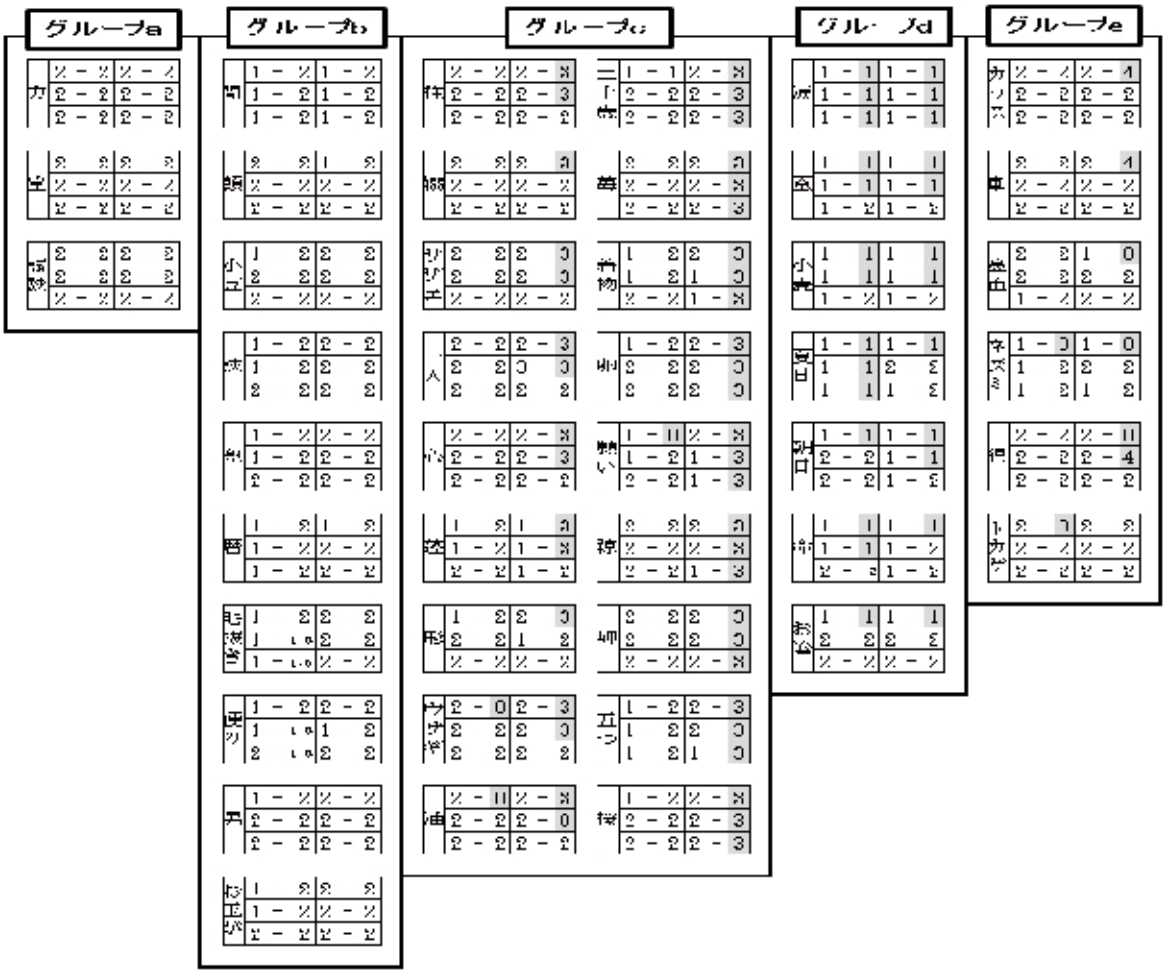


【表３】A氏の発話の規則適用の解釈

		単独発話					文発話				
グループ	音韻論的型解釈	音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Ⅰの適用	音声学的規則Ⅱの適用	音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Ⅰの適用	音声学的規則Ⅱの適用
a	/○○⌉○/	[2-2]	27	○	○	○	[2-2]	27	○	○	○
b	/○○○⌉	[2-2]	18	×	○	○	[2-3]	22	○	○	×
		[1-2]	12	×	○	○	[2-2]	18	×	○	○
		[1-0]	6	○	○	×	[1-3]	2	○	○	×
		[2-0]	1	○	○	×					
c	/○⌉○○/	[1-1]	6	○	○	×	[2-2]	9	×	○	○
		[1-2]	6	△	○	○	[1-2]	5	△	○	○
		[1-0]	3	△	○	×	[2-4]	1	×	○	×
							[2-0]	1	×	○	×
d	/○○○/	[2-2]	22	×	○	○	[2-2]	30	×	○	○
		[1-0]	12	○	○	×	[2-0]	8	○	○	×
		[1-2]	9	×	○	○	[2-3]	5	×	○	△
		[2-0]	5	○	○	×	[2-4]	5	×	○	×

○：適用　×：不適用　△：特殊な適用

【図４】Ｂ氏の発話のグループ分け



【表４】Ｂ氏の発話の規則適用の解釈

グループ	音韻論的型解釈	単独発話					文発話				
		音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Ⅰの適用	音声学的規則Ⅱの適用	音調	発話数	音韻論的型の適用	音声学的規則Ⅰの適用	音声学的規則Ⅱの適用
a	/○○˥○/	[2-2]	9	○	○	○	[2-2]	9	○	○	○
b		[1-2]	16	○	○	○	[2-2]	24	○	○	○
		[2-2]	10	○	○	○	[1-2]	6	○	○	○
		[1-1.5]	4	△	○	△					
c	/○○○˥/	[2-2]	39	×	○	○	[2-3]	36	○	○	×
		[1-2]	11	×	○	○	[2-2]	9	×	○	○
		[1-1]	1	×	○	○	[1-3]	6	○	○	×
		[2-0]	3	○	○	×	[1-2]	2	×	○	○
		[1-0]	1	○	○	×					
d	/○˥○○/	[1-1]	14	○	○	×	[1-1]	12	○	○	×
		[1-2]	2	△	○	○	[1-2]	6	△	○	○
		[2-2]	4	×	○	○	[2-2]	3	×	○	○
		[2-1.5]	1	△	○	△					
e	/○○○/	[2-2]	13	×	○	○	[2-2]	11	×	○	○
		[1-2]	3	×	○	○	[2-4]	3	○	○	×
		[2-0]	1	○	○	×	[1-0]	2	○	○	×
		[1-0]	1	○	○	×	[1-2]	1	○	○	×

○：適用　×：不適用　△：特殊な適用

これを次の（ア）～（ウ）の３つの規則が組み合わされて適用されていると解釈してみる。

（ア）音韻論的型　下り核　／○○○，○○○⌉，○○⌉○，○⌉○○／

（イ）音声学的音調規則Ⅰ〔「○○○･･･〕又は〔○「○○･･･〕

（ウ）音声学的音調規則Ⅱ〈○○⌉○･･･〉

組み合わせとして(ア)＝(ウ)＋(イ)，(ア)＋(イ)，(イ)＋(ウ)，(イ)のみ，がある。表３に示す。

上野（前掲）では蓮田市を上げ核と句音調｛「○○⌉○･･･」で解釈している。本論の久喜市の音韻論的型（ア）では，上昇位置が／○○○／以外の語では「２」「１」が混在し「３」もなく，また上野氏の解釈の根拠として大事と思われる重起伏が現れにくいところから，上げ核では解釈が難しいと考え，下り核に設定する。また，（イ）（ウ）のように音声学的音調規則を上昇のⅠと下降のⅡに分けた。

Ａ氏と同様のことをもう一人Ｂ氏（Ｔ14 生まれ女性）に対しても行った。図４と表４に示す。

グループａ：単独・文とも[2-2]で安定。

グループｂ：単独・文とも[1-2][2-2]まれに下降に 1.5。

グループｃ：単独で[1-2][2-2][2-0]，文で[2-3][1-3][2-2]。文で下降３が現れる点が特徴。

グループｄ：単独・文とも[1-1][1-2][2-2]。下降１が現れる点が特徴。

グループｅ：単独で[2-2][1-2][1-0][2-0]，文で[2-2][2-4][1-0][2-0]。文で下降４や０が現れる点が特徴。

以上のように解釈した二人の話者の表３と表４を比較してみる。両者とも／○○⌉○／では（ア）と（ウ）が重なるためゆれが少なく安定した音調になる点が共通している。また／○○○⌉／と／○○○／の語単独発話では，（ウ）が（ア）より優先され，語単独発話に下降が実現される点も共通している。この二つの型は文発話になると傾向が異なり，／○○○⌉／　は（ウ）より（ア）が優先されて下降「３」が出てくる。とはいえ（ウ）が優勢な下降「２」も少なくない。つまり，（ア）の音韻論的型が絶対ではなく，音声学的音調規則が型を無視する場合もあるということである。特にＡ氏の方にその傾向が強い。／○○○／の文発話では（ア）より（ウ）が優先されて下降が出てくる。また，このように語単独と文発話の音調が異なる理由も，規則の適用で文発話より語単独発話の方が（ア）より（ウ）が優先されるところから生じているという説明ができる。／○⌉○○／はＡ氏とＢ氏で異なる。両氏とも語単独発話では下降「１」という（ア）が優先された音調が主である。しかし，文発話ではＡ氏は下降が「２」となり，（ウ）が優先されているのに対し，Ｂ氏は（ア）の下降「１」の方が多い。

本論では二人のケースしか提示できなかったが，S10 生まれ女性の話者では，A 氏・B 氏と反対に語単独発話では（ア）が適用され，文発話になると（ウ）の方が優勢的に適用されるようなケースもある。T13 生まれ男性は／○○⌉○／でも語単独発話では（ア）も（ウ）も適用されずに（イ）のみで，従って下降がない音調が多くある。

（ア）の音韻論的型自体の判別もＡ氏・Ｂ氏より難しい話者も多い。一応，表５には全話者について各語の型を判別して一覧にした。語によって傾向はあるものの話者によってばらばらである。特に（ウ）が優先された発話が多数を占められる話者においては／○○○／と／○○○⌉／の判別がつきにくい。少なくとも大野（前掲）のようなⅠⅥ／ⅡⅣ／ⅢⅤというきれいな語類の対立ではない。大野氏で文発話では様々であるのに，どの類でも語単独で○●○か○●◎になるという報告は本論の（ウ）が語単独で強く適用されていた結果と考えられる。

【表５】全話者の音韻論的型

語	アクセント語類	T5 生男	T11 生女 b	T11 生女 a	T13 生男	T14 生女	S② 生女	S5 生男	S6 生女	S7 生男	S9 生男 a	S9 生男 b	S10 生女	S12 生女	S12 生男	S14 生女
着物	Ⅰ	②	③	③	⓪	③	③	⓪	⓪	③	③	⓪	③	③	③	⓪
形	Ⅰ	③	③	⓪	⓪	③	③	②	②	③	⓪	⓪	③	③	⓪	⓪
車	Ⅰ	⓪	③	②	⓪	⓪	⓪	③	③	⓪	③	③	⓪	⓪	⓪	⓪
鼻血	Ⅰ	⓪	③	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	②	⓪	⓪	②	②	⓪	⓪	⓪
鰯	Ⅰ	⓪	⓪	⓪	⓪	③	⓪	③	⓪	⓪	③	③	⓪	⓪	⓪	⓪
毛抜き	Ⅱ	①	③	③	⓪	②	⓪	②	①	⓪	③	⓪	⓪	③	③	③
小豆	Ⅱ	②	⓪	②	③	②	⓪	③	⓪	⓪	③	③	⓪	②	③	③
間	Ⅱ	⓪	③	②	③	②	③	②	③	③	③	②	③	③	③	⓪
桜	Ⅱ	③	⓪	③	③	③	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	③	③	⓪
トカゲ	Ⅱ	③	⓪	②	③	⓪	③	②	⓪	⓪	③	②	⓪	⓪	⓪	⓪
二十歳	Ⅲ	①	⓪	③	②	③	⓪	②	⓪	⓪	③	③	①	③	①	②
岬	Ⅲ	⓪	⓪	③	⓪	③	⓪	②	①	③	③	③	⓪	⓪	③	⓪
小麦	Ⅲ	②	②	①	③	①	②	①	①	③	②	①	②	⓪	①	③
サザエ	Ⅲ	②	②	⓪	③	③	②	③	①	③	②	⓪	③	①	①	①
力	Ⅲ	⓪	③	②	⓪	②	②	②	⓪	③	③	②	③	③	③	③
頭	Ⅳ	②	⓪	②	③	②	⓪	③	⓪	⓪	③	⓪	③	⓪	③	③
男	Ⅳ	⓪	②	②	③	②	⓪	③	①	⓪	③	⓪	③	③	⓪	③
鋏	Ⅳ	⓪	⓪	②	②	②	⓪	②	⓪	③	③	②	③	⓪	③	③
暦	Ⅳ	②	⓪	②	②	②	⓪	⓪	③	⓪	③	⓪	⓪	③	③	③
宝	Ⅳ	②	⓪	②	③	②	③	⓪	⓪	⓪	③	③	③	③	③	③
命	Ⅴ	①	①	①	①	①	②	①	①	②	①	①	①	②	①	①
油	Ⅴ	⓪	⓪	③	③	③	⓪	②	⓪	⓪	⓪	③	③	⓪	③	⓪
涙	Ⅴ	①	②	①	①	①	②	①	①	②	③	①	①	③	①	①
朝日	Ⅴ	⓪	②	②	⓪	①	②	①	①	⓪	③	①	②	②	①	①
柱	Ⅴ	③	②	③	③	③	③	⓪	⓪	⓪	③	②	③	③	⓪	⓪
心	Ⅴ	／	②	／	／	③	⓪	／	／	⓪	／	／	②	⓪	②	／
五つ	Ⅴ	／	②	／	／	③	②	／	／	⓪	／	／	②	②	③	／
烏	Ⅵ	①	②	②	③	⓪	②	③	①	①	①	③	①	①	⓪	①
鼠	Ⅵ	⓪	③	⓪	⓪	⓪	⓪	②	⓪	③	③	⓪	③	⓪	⓪	⓪
兎	Ⅵ	⓪	③	③	②	③	⓪	③	⓪	③	③	①	⓪	⓪	⓪	⓪
狸	Ⅵ	①	①	②	⓪	⓪	①	③	①	⓪	①	⓪	①	①	①	①
莖	Ⅵ	⓪	⓪	③	③	③		③	①	⓪	②	②	⓪	⓪	③	⓪
兜	Ⅶ	①	①	③	⓪	②	①	②	①	②	③	③	③	①	①	①
苺	Ⅶ	②	⓪	③	⓪	③	①	③	①	⓪	③	⓪	⓪	⓪	③	⓪
便り	Ⅶ	①	②	⓪	③	②	②	③	①	③	①	③	①	①	①	①
蜜	Ⅶ	①	①	①	③	①	①	①	①	①	①	⓪	①	①	①	①
鯨	Ⅶ	⓪	⓪	⓪	⓪	③	⓪	②	⓪	③	③	③	③	③	⓪	⓪
一人	Ⅶ	／	②	／	／	③	②	／	／	③	／	／	②	②	③	／
お玉		／	②	／	／	②	②	／	／	⓪	／	／	②	②	③	／
お箸		／	②	／	／	①	②	／	／	①	／	／	②	②	②	／
試験		／	②	／	／	②	②	／	／	②	／	／	②	⓪	③	／
卵		／	②	／	／	③	⓪	／	／	②	／	／	⓪	②	③	／
夏日		／	②	／	／	①	②	／	／	②	／	／	⓪	⓪	①	／
願い		／	③	／	／	③	⓪	／	／	③	／	／	⓪	②	③	／

①:／○⌉○○／ ②:／○○⌉○／ ③:／○○○⌉／ ⓪:／○○○／

６.「曖昧アクセント」という久喜市アクセントの位置づけ

以上のように，久喜市の音調のゆれが音韻論的型（下り核）と音声学的音調規則Ⅰ（上昇），Ⅱ（下降）の三つの規則の適用および不適用の組み合わせによって起こっていることを説明した。しかし，前節や表２で見てきたとおり，型意識が希薄になっていることは確かである。それでも出現する音調には傾向がある。その音調のバリエーションは音韻論的型を無視し音声学的音調規則の方が強く適用されることによって多様に生成される。決して無型アクセントではない。型や規則の適用は発話の単位や個人によって差があり，音韻論的型と音声学的音調の力の拮抗関係が安定していないことがまさに「ゆれ」の実態であり，「曖昧アクセント」の実態なのではないか。本論のような捉え方に

より，「型意識の曖昧さ」というだけの定義からさらに踏み込んでいけると考える。

さらに通時的に考えてみると，音韻論的型より音声学的音調規則が優勢になるところに明確な型意識のあるアクセントから曖昧アクセント，あるいは別の体系のアクセントに移行する契機があると思われる。つまり，このようなゆれの多い曖昧アクセントの状態が長く続くというのも考えにくいのである。このような状態が次世代にどのように引き継がれていくのか。木野田（1972）には東京アクセント化していくという報告があるが，もし共通語化という働きがなかったら次の音韻論的型の体系を生み出すのか，無型アクセントとなるはずのものであったのか。まだ不明な点も多く，全国に散在する曖昧アクセントが全てこのような分析が可能であるとも限らないが，本論のように共時的解釈することで，通時的にも曖昧アクセントの位置づけを明確にし，曖昧アクセントの中の更なる細分類ができるのではないだろうか。

文献

秋永一枝・佐藤亮一・金井英雄（1971）「第２章第１節　利根川上・中流域のアクセント」『利根川―自然・文化・社会―』弘文堂，164-175.

上野善道（1977）「日本語のアクセント」『岩波講座日本語５　音韻』（岩波書店），281-360.

上野善道（1984）「新潟県村上方言における特殊アクセントの諸相－その曖昧化の課程－」『金田一春彦博士古稀記念論文集第２巻』（三省堂），390-347.

大野真男（1984）「埼玉県東北部における特殊アクセントの諸相－その曖昧化の過程－」『現代方言学の課題第 2 巻記述的研究篇』（平山輝男博士古稀記念会編）（明治書院），260-280.

木野田れい子（1972）「埼玉県埼玉群久喜町のアクセント－曖昧アクセントから東京アクセントへ－」『都大論究』10 ，58-67.

金田一春彦（1977）「関東地方に於けるアクセントの分布」『日本語方言の研究』（東京堂出版），217-335.

佐藤亮一（1974）「アクセントの「ゆれ」をめぐって－曖昧アクセント地域を中心に－」『青山語文』4 ，71-86.

吉田健二（1993）「埼玉特殊アクセントの崩壊過程」『国文学研究』111（早稲田大学国文学会），100-90.

付記

日本語学会 2013 年度春季大会で「曖昧アクセントの一解釈－埼玉特殊アクセント地域における三拍名詞のゆれの分析から－」として発表したものである。